

こんにちは。嘱託員の村上です。先週は企画展示「むかしの教科書～寺子屋から学校～」の展示内容の中から、江戸時代に使われた教科書に関する話題をお届けしましたが、今回は明治初期に使われた教科書についてお話しします。

明治4年（1871）7月、政府は教育行政を総括する機関として文部省を設置し、欧米諸国の教育制度を参考にした新しい教育制度を創設する準備を進めました。そして、明治5年8月に「学制」を發布して、全ての国民を対象とする学校制度を定めました。

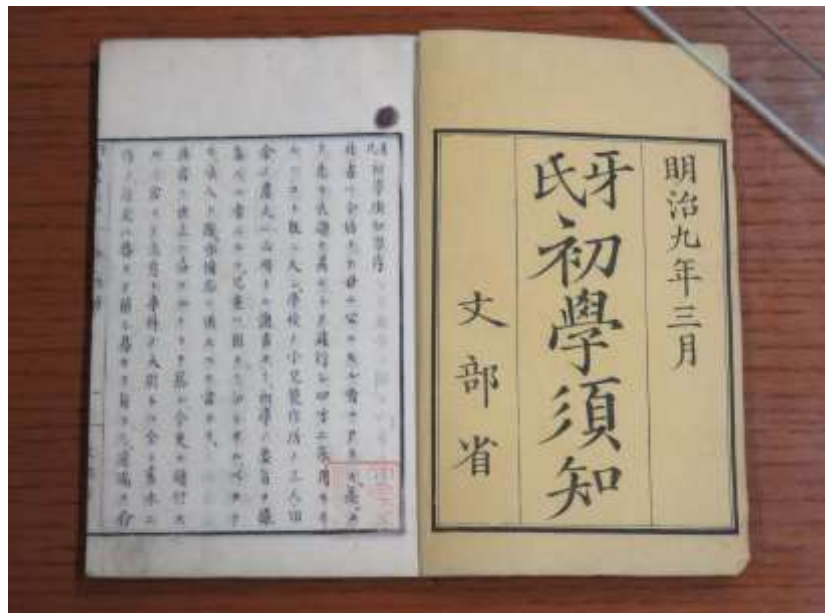
学校で使用する教科書については、明治4年9月、文部省内に編輯寮^{へんしゅうりょう}において編集に着手し、明治5年9月に公布した「小学教則」で具体的な教科書を示しました。

この時、文部省が編集した教科書の中には、欧米で用いられている教科書や初学者向けの入門書を翻訳・編集したものが多数ありました。また、「小学教則」には文部省編集の教科書に加え、一般向けの読み物として出版された翻訳書や欧米の近代文化を紹介する図書も教科書として示されました。福沢諭吉が著した『学問のすゝめ』もその一つです。

このように、明治初期は翻訳書を教科書として用いることが多かったことから「翻訳教科書時代」とも呼ばれています。特に、理科教育の分野では近代科学を導入するために多くの翻訳教科書が出版されました。市民図書館7階廊下には『天変地異』（明治元年）、『改訂増補 物理階梯^{かいてい}』（明治9年）、『牙氏^{がし} 初学須知^{しょがくすち}』（明治9年）という3つの理科教科書を展示しています。これらは小学校で使われたものと考えられます。



『改訂増補 物理階梯』
（歴史資料室蔵）



『牙氏 初学須知』
（歴史資料室蔵）

『天変地異』は小幡篤次郎（のちの慶応義塾塾長）が一般向けに出版した科学入門書で、天変地異と呼ばれ恐れられていた地震や彗星^{すいせい}といった現象の仕組みを解説しています。例えば、「雷^{かみなりよけ}避^{たこ}の柱の事」という項目では、雷が電気であることを証明したベンジャミン・フランクリンの風揚げ実験を紹介しています。「小学教則」では下等小学第5級（現在の小学2年生後期に相当）の教材に指定され、教師が子どもたちに読み聞かせるかたちで使われたそうですが、小学2年生が学ぶものとしては高度な内容だったと思われます。



『天変地異』
(歴史資料室蔵)

明治初期の学校では、こうした翻訳教科書を用いることによって新しい文化や科学的な考え方を普及しようとしていたのです。

【前回の答え合わせ】

前回の「ねずみ算」の答えは「276億8257万4402匹」です。